

第三編

抑留生活・復員

一、抑留生活よくりゆう

(1) 武装の解除と部隊再編成

終戦後、各地に分散して休養をとっていた連隊は、英軍の指示により、サルウィン河口のマルタパンの草原に集結することになった。そしてここで所持している兵器や弾薬の総てを、英軍に引き渡すことになり、小銃や機関銃それに拳銃や軍刀双眼鏡にいたるまで、指定された集積所に集められた。

私は戦争に負けたとはいえ、将校の魂として戦闘中肌身離さず携帯していた軍刀を諾々として差し出してしまうのも癪しやくだったので、短かく折って短刀として携行しようと思った。そこで軍刀を折るため、木の枝のまたにはさんで、左右に力の限り曲げようとするが、いっこうに折れも曲がりもしない。そこで、二箇の離して置いた大きな石の間に差しかけて、思い切り飛び上がって、刀の真中を踏みつけてみた。二回、三回と繰り返すがびくともしない。十回近く反覆して、やっと折ることができた。日本刀というのは、繰り返し繰り返し鍛えられていて、いざという時には、あの細い刀身でも折れも曲がりもしないと聞いていたが、まさにその通りでその強靱きようじんさには驚いた。

連隊はここで、復員帰還の後、相協力して戦後の復興に励み、かつは共に協力して慰霊の事業を推進するため、動員以来の部隊編成を解いて、郷土別の編成をことにした。すなわち、鳥取県西部出身者を以て第一大隊を、鳥取県東部および中部出身者を以て第二大隊を、兵庫県出身者を以て第三大隊を編成した。私は引き続き兵庫県大隊すなわち第三大隊の副官として勤務することになった。

英軍は、私たちのような終戦時まで戦闘に従事していた部隊員を「被武装解除軍人」として、戦争中捕らえられて俘虜になった者とは別扱いとし、復員の日まで部隊編成を認めそれまでの階級章を付けることを認めてくれた。終戦後、希望もないままに抑留よきうされた二年間、組織として規律を保つことができたのは、郷土別の編成と階級を維持し得たことが大きな力となった。

(2) 冬瓜とうがんの味

十月初旬、連隊は、ラングン北方約百キロメートルの「パヤジー」に移された。有り難いことに鉄道輸送で、戦闘中のような難行ぎやう苦行の行軍をする必要はない。ここでは、広い原っぱの中で、小屋掛け用として柱になる竹と、椰子の葉で作った屋根材を支給してくれた。長かった雨季もようやく終って、暑さがもどって来る時候である。屋根は支給され



た屋根材を荒目に並べ、残ったのは土の上に敷いて庭がわりとした。未だ体力が回復せず、毎日毎日土の上へごろ寝の明け暮れであった。ときたま労務割当があり、不発弾処理の手伝いに出る程度であった。食物も不十分ながら定期的に配給してくれるようになり、皮肉なことに戦時中に比べてはるかに厚遇であった。

ある時、労務でキャンプ外に出た兵が、ビルマ人から内緒でもらったといつて「冬瓜^{とうがん}」を四分の一ばかり持って帰ってきた。冬瓜というのは瓜の一種で、日本の瓜の五倍位もある大きなものである。味はやはり瓜のようであるが、煮て食べることが多い。中国でたくさん採れてしかも貯蔵がきくので、上海からサイゴンの船中では、毎朝毎晩この冬瓜の味噌汁であった。そのぐしゃぐしゃとした歯ざわりと独特の臭いから、みんなに敬遠されて、

見るのも嫌といわれるほどであった。

持ち帰った冬瓜を、塩煮にして一切れずつみんなに配られた。それを口にした時、何とおいしい事か、まるでピフテキを口にしたように思えた。形も歯ざわりも全々異なるのに、ピフテキを連想したのである。野菜から随分遠のいていたとはいえ、あの冬瓜がこんなにもうまいものであったとは驚きである。口の中の冬瓜は、呑み込むのが勿体なくて、しばらくそのままにしていた。

食べ物には、うまいまじいはいない。食べる人の口次第で、うまくもなったり、まずくもなったりするものであることを知らされた。

(3) 体力の回復

昭和二十年十二月の中旬、連隊は各大隊に別れて、新たな抑留作業地に移るようになった。ここでも私はすばらしい幸運にめぐり合わせた。すなわち、第一・第二大隊は酷暑の作業地に移ったのに比べ、私たちの第三大隊は、パヤジの現キャンプ地から北へおよそ六百キロにある、高原の町「メイミヨー」に移されたのである。

メイミヨーは、戦前ビルマがイギリスの統治領であったころ、酷暑期の英人の避暑地になっていた町で、標高が千数百メートルもあり、日本でいう朝鮮松や彼岸桜がある気候温



私が起居していた部屋（左端）

和な美しい町である。日本でいえば、さしずめ軽井沢といったところであろうか。これから体力が回復しようという私にとって、最良の環境に移ることにした訳である。

メイミヨーでは、当初町の入口にある飛行場の隅の草っ原の中にテントを張って生活した。年末であったが、昼間は少し汗ばむくらいで、夜

は毛布がほしい位である。日曜を除く毎日、道路の補修や橋の修理等の軽度な作業があり、夜はみんなで焚火を囲んで、帰還の話や内地のようすを想像して語り合った。

この地へ来てから、驚いたことは毎日毎日お腹が空^すいてかなわないということであった。英軍からは馬鈴薯や人參の乾燥野菜や若干のラード、時にはバナナ等もくれた。多分、カロリーの上では適量かも知れないが、体力回復期の体にとつては、食べても食べてもお腹が空いている。小川のほとりに生えている軟らかい草を摘んで来ては一緒に調理する。バナナが支給になった日は、中の実を全部食べたあと、皮の内側の白い部分も爪で削りつつ

て、きれいに食べる。残った外側の皮は何とかして食べられないかと、焼いてみたり脂でいためてみたりする。煮ても焼いても食えないとなると、うらめしそうに初めて捨てるといった状態である。

ここでは「人間の体というのは、何とすばらしい働きをするものか。」ということに身にしみて実感させられた。すなわち、栄養失調の極限状態から、一転して体力の回復期に入ると、人の体は食べた物を片はしから完全に消化し吸収してしまうのである。毎日毎日、餓鬼^{がき}のようになって食べるけれどもなお体は食べ物^をを要求する。そして食べた物は、一物も残すまいとして全部体に吸収する。尾籠^{びろう}な話で恐縮だが、排便は一週間か十日置きに行く程度である。その便所行きが大変である。肛門に繊維が固くからみついていて出て来ない。だから、便所へ行く時は木ぎれを持って行って、表面から少しずつ掘り出さなければならぬ。涙ながらの難行苦行である。このころの一番つらかったことは、英軍の労務作業でなくこの便所での作業であった。

おかげで、体力も日増しに回復し日々の倦怠感もとれ、人並みの生活ができるようになった。

(4) メイミョーキャンプ

昭和二十一年二月、私たちの大隊は、メイミョーの東はずれにある昔の監獄の跡地で、



メイミョーキャンプ跡（昭和46年）

広さが野球場の三倍ほどもある大きなキャンプ地に移った。ここが、いわゆるミイミョーキャンプで、内地帰還までの一年半を過ごしたところである。私たち将校は、煉瓦建ての昔独房に使っていた長屋の屋根、窓、入口を修理して入居することにした。兵隊たちは、各隊ごとに広場に整然と天幕を張って宿舎とした。そして、第二大隊をはじめ他の部隊も

次々と移動して来て、キャンプ地は五千人位にも膨れあがった。

キャンプでの生活は、毎日朝八時過ぎから、英軍から割当てられた作業場へ出て労役をする。そして午後五時ごろに帰って休養をするといった単純な生活である。兵隊たちの願望は、「一日も早く、日本へ帰りたい。」ということのみである。三月^{みつき}経つても半年経つても、一向に内地還送の話が無い。そのうちに、こつくりさん占いが、あちらでもこちらでも行われるようになった。箸を三本組み合わせて、「こつくりさん、こつくりさん、あと何月したら帰られますか。」と、卓の上を拳^{こぶし}で叩く。占いは、あ

と三月経つたら船が来ると出ているぞ。」他愛もないことと思える占いに、笑いもできない。みんなの何かをして何かにすがりたいという思いが、痛いほどよくわかる。

果して帰国できるかどうか、全く見通しが立たない、すなわち希望を失った生活。その上、いくら日常の仕事に頑張ってみても、階級が上がる訳でもなし、賞められることもない。また、食料は皆平等であり、何を努力してみたところで、生活が向上することもない。つまり「希望もない。地位や名誉もない。金銭の必要もない社会。」これが致し方のない現実の社会であるが、こんな社会ではみんなの心は段々と荒んで来る。みんなが怒りつづくなる。怒鳴り合いは日常のこと、喧嘩も起きてくる。友だちの将校との話し合いの中で、彼は、「日本人が嫌になつたのう。」といった。まさに至言である。明治以来、学校教育の中核に置いて教えられた「修身教育」とは一体何だったであろうか。人々が表面で一応の体裁を保っている時だけの道徳であつたろうか。ともかく、理性の麻痺した社会である。

私の、キャンプでの仕事は、前夜に英軍から指示して来る労務の場所と人員を、各中隊に割りふりをして、朝それぞれから迎えに来たトラックに乗せて送り出すこと。連隊（二、三大隊）に支給になる食料や日用品を総括して配分をしたり、調理場へ渡すこと。そして時には、喧嘩や暴力が起つた際、出向いて仲裁をしたり宥めたりすることもある。

キャンプでの労務は種々雑多で、若干の技術を持った者は、医務の検査、散髪、炊事、

洗濯、植木の手入等、固定した労務につき、一般の者は兵舎建築の下手間や、それらを維持管理する雑役、道路や橋の修理、はてはゴミ処理場の使役等雑多であつた。

日本人は性格的に請負い仕事には適しているが、一定時間働くということには弱いところがある。仕事場に着くと、一斉に請負^{うけお}いの交渉をしてくれと頼んで来る。交渉がうまくいつて「今日の仕事は、これだけやったら終り」と決まると、それこそ休憩時間も惜しんで全力を出し切つて働く。そして半日ぐらゐで仕事を終えると、儲け物^{もうけもの}をしたような顔をして帰つて来る。もし、一日八時間とかの時間制になると、仕事は怠ける、さぼるで、その姿は監督していても恥かしいほどである。別に請負いで仕事をして、余つた時間を何に使うという訳でもない。拘束される時間が短いのを好むのか、目標を達成する快感を楽しむのか、ともかく請負いを好む性格がある。

炊事当番は、鳥取大隊の班と兵庫大隊の班とを、半月交代で当らせた。すると、鳥取班が炊事の当番となると、兵庫の連中が「こんな塩からい汁が食えるか。」とどなり込む。反対に兵庫班が当番につくと、鳥取の連中が「こんな甘い汁が飲めるのか」と、くつてかかる。幼時期から体に沁みついた味覚というものは、恐ろしいものだなあと沁々^{しみじみ}思つたことである。

終戦から一年も経つと、帰還についても、なるようにしかならないといった諦め^{あきらめ}の氣持

ちも出てくる一方、現場での英軍とのかけひきの要領も会得して来て、気分も楽になる。演芸会や野球試合の開催等、キャンプ内の生活にもゆとりと潤い^{うるお}が出てきて、収容所内も平穩になって来た。特にキャンプ地の警備や日々のエスコートを勤めるインド兵は、我々日本人に対して劣等感を持っていたので、日常のいろいろなやりとりの面で、万事好都合のことが多かった。

英軍から支給される食糧は、主に馬鈴薯や人參、玉葱の乾燥野菜と、それに副食としてラード、鰯やミルクの缶詰、時たまコンビーフやベーコンもあった。ラードは調理用に若干残して、大部分が夜間の室内のあかり用として各テントに配分した。缶詰類は、副食としてそのまま食べても、量も少ないし大して美味^{おい}しくもないので、ビルマ現地人との物々交換用として使用した。毎週一回、インド兵に内密で金を渡してトラックを二台用意させる。それに缶詰類を隠して積み込んで、英軍の眼の届かない奥地のビルマ人部落に行く。そこで、牛肉やうるち米、もち米、野菜等と交換して帰る。帰りは、労務に出たふりをして、堂々と営兵をごまかして通る。運転手の買収費が一人一回五ドルである。思えば戦勝国の兵隊が、戦敗国の兵隊に買収されて不正の片棒をかつぐとはまことに噴飯ものである。これを始めてからキャンプの生活は飛躍的に向上し、米の飯は出るは、餅は作られるは週に一回の茶碗蒸しは出るはで、恐らく戦後の内地とは雲泥のちがいであったろう。

キャンプに入つて驚いたことの一つは、日本人の器用さである。日本人は無から有を生じさせる名人である。キャンプに入つて、多くの者がまず作り始めたのが、麻雀マージャンの牌である。材料となる竹あるいは堅い木は、ピルマにはたくさんある。労務作業に出た際に、金切り鋸の歯を持つて帰る。それで竹をまず牌の大きさに切る。それを一つ一つていねいに砥石で磨いて形を整える。次に鋭利な小刀（これも作業場から持ち帰った鋼を研いで作ったもので、牌の表面に「こーこーていねい」に図柄を彫りつける。最後に、青や赤のインク、黄色いマリアの葉キニーネを使って彩色を施してでき上りである。なかなか根気のいる仕事ではあるが、こんなことには、極めて熱心でかつ緻密である。一日の労務を終えて帰つて来てからの楽しみは、専らマージャンである。どの天幕からも、每晚毎晩、あきることもなくジャラジャラという牌を混ぜる音が夜遅くまで響いていた。

また、キャンプで人気のあるのが、毎月二回催される「演芸会」である。キャンプ内に斜面を利用した屋外演芸場が作られ、団員は、日常の労務からは除外されて、練習に専念する。演芸団の中には、弦楽団、劇団、それに落語や漫才のメンバーがいる。もちろん、楽器は手作りの精巧なものであり、演劇の服装も、食料の入つて来た麻袋や天幕の布を使つて作られたもので、夜の裸電球のもとでは、実物と変わらないほどりっぱに作られている。ある晩、演劇で、「湯島の白梅」が演じられた。その際、「お薦つた」に扮した女形の演劇が

実に上手で、やんやの喝采を浴びたが、後で印度のエスコートから、日本兵は女をかくまっているといつて家捜しを受けるという事件が起こったほどである。

日曜日には、よく隊毎の対抗の野球試合が行われた。配属されていた野砲隊に、入隊まで、プロ野球の選手をしていたという人がいて、その人の指導で大会の運営が行われていた。ミットやグローブは、英軍貨物車のシートで作られたものであるが、ボールに至っては、ゴムの芯に毛糸や麻糸をきつく巻き締め、巴形に切った二枚の皮を縫いつけた精巧なものであった。

激しい戦闘で持物の総てを失い、着のみ着ままでメイミョーキャンプ入りをしたみんなであつたが、一年半を経て帰還する時には、全員がみんな新しいリュックサックを背負っていた。これは、別に英軍から支給を受けたものでなく、抑留生活の間に作ったものである。すなわち、キャンプ内には縫製の器用な連中がいて、^{かばん}鞆屋の店開きをしていた。みんなは、労役の帰りに乗つて来た軍用のトラックの幌を鋭利な刃物で切り取つて持ち帰り、工賃として煙草を何箱か払つて鞆屋に作らせたものである。細工は上々で、復員後内地のどこに出しても恥かしくないほどの代物であつた。

二、復員

昭和二十二年六月上旬、師団から待ちに待った内地帰還の通知がもたらされた。今まで何十回となく帰還のデマに踊らされて来たが、今度こそは本物である。一同は小踊りして喜んだ。

しかし、この時、私は不運にもマラリヤを発病してしまった。いよいよキャンプをたたくんで列車で乗船地のラングーンに向かうというのに、ひどい高熱になやまされることになった。今まで萬死をのり越えて来たのだから、内地帰還を目前にして斃れてしまうようなことになったら、残念の極みである。石に嚙りついてでも帰らねばならない。

列車に乗り込むまでは荷物は兵隊に持ってもらい、体一つでようやく行軍の最後尾を歩いた。食べ物全然欲しくない。喉が渇くが満足に湯茶もない。振動の激しい貨物列車にゆられること二日、ようやくにしてラングーンのキャンプに到着する。四年前の昭和十八年夏、初めてビルマに上陸したのもここであつた。が、今は感慨も何もあつたものではない。何としても、みんなと一緒に、日本行きの船に乗り込まねばならない。

かつて、戦闘中には激しい下痢に悩まされたが、その時は、竹の炭という薬があつた。

が、このマラリアにはキニーネという薬しか効かない。もちろんそんな薬が日本軍にあらうはずがない。ただ頭を床をつけ動かないようにして体力の消耗を防ぎ、自然に症状が治まるのを待つしかない。

六月十九日、私たちを乗せた「熊野丸」はついにビルマの陸地を離れた。みんな甲板に立って万才を唱えている。半死半生で生き抜いたビルマ、たくさんの遺骨を呑み込んだビルマ、さようなら、さようなら、永久にさようならだ。このころより熱も下がり出して物も食べられるようになってきた。この分だと、何とか内地の土が踏めそうだ。嬉しくなってきた。途中で、給水給炭のためシンガポールに寄港したが、来る時のように潜水艦の攻撃を避けてのジグザグ航法の必要もなく、波も静かな東支那海を、日一日と船は日本に近づいていく。日本に到着する一週間ほど前、一人の戦友がマラリアのため病没した。そして帆布に巻かれて、船尾から水葬に付された。祖国を目前にしての病死、本人の心は如何ばかりであつたろうか。他人ごととは思われない。

七月四日、やっと懐かしい九州の山々が見え出した。船はなおも進んで、点在する小島が眼前に見え出した。島に点々と生えている青い松の木が無性に嬉しく見られる。ついに帰った。日本に帰った。二度と踏むことはないだろうと思って出発した日本に帰ったのだ。

昭和二十二年七月五日、広島の子品港着、一斉に階級章をとりはずして上陸準備に入っ

た。思えば、昭和十五年十二月一日に入隊して、星一つの二等兵の階級章が与えられてから六年半、陸軍中尉の階級章をはずして、一民間人になったのだ。上陸して、米軍兵士から体中にDDTの白い粉を吹きつけられ、全身消毒の後、復員事務を終えて米子行きの列車に乗った。

夜遅くなつて、汽車は懐かしい米子駅に着いた。駅はたくさんのお迎えの人でごった返していた。その中に、三大隊本部付きで戦死した丸山少尉の遺族もおられたので、伴われて同君宅へ行った。そして同君の生存中の活躍のようすや、死亡当時の状況について報告した。しかし、死亡原因についてはアเมอร์バー赤痢による衰弱死ということで、口をにごさざるを得なかった。遺族もそれで納得してくれたが、五十年を経た今でも心に懸かることである。

翌朝の汽車で米子を発つて松江に向かった。松江駅ではたくさんの人に混つて下車した。そして、プラットホームを歩いて、跨線橋の階段の下まで着いたが、どうしても階段を歩いて上がる元気がない。そこで、人々が階段を登ってしまうまで暫くの間、プラットホームに腰をおろして待つことにした。そしてみんなが登り終えて階段に人影がなくなったのを見図らつて、助走をつけて走つて行つて登った。ようやく三分の二位まで登られたので、後は四つんばいになつて登りきった。

改札口のところまで、兄が出迎えに来てくれていた。ここで、兄の口から、留守中に父が死んだことを聞かされた。亡くなつたのは、終戦の年の十一月だったとのこと。そう言われて見れば、抑留のキャンプ地から家宛ての手紙の宛て名を、初めは父宛てにしていたが、二十一年ごろからは、何とはなしに兄の宛名にしていたのが、今でも不思議に思われる。兄は、私があまりにも衰弱しているのを見て驚いたらしく、タクシーを算段して来てくれたので、それに乗って家に帰り着いた。ペグーの山中で何回となく夢に見た、川のほとりの我が家である。

ついに家に帰り着いたのだ。何回となく死線の中を彷徨しながら、その都度、強運に扶けられて、今ようやく家に帰り着いたのである。有り難たいことである。帰還に際して発症したマラリアのため、体力は相当弱つてはいたが気分は頗る爽快である。これからは、少々の苦難は、ビルマ戦線の経験を想えば、平氣の平左でしのいでいける。

山と積もる話もそこそこに、母が客間に蒲団を敷いてくれた。なかなか寝つかれないでいる耳に、隣りの部屋の家族の会話が、聞こえる。

「せっかくもどって来たけど、あの体ようすでは、これからが心配だなあ。」

「あの顔つきでは、あと四、五年も持つだろうか。」

自分自身では元氣で復員して、「さあ、これからの人生、これからの青春。」と思っている

時だけに、驚きでもあったし心底から心配してくれる家族の情愛が嬉しくもあった。そして、他人の眼から見ればわずか四、五年の寿命かと、自分にいい聞かせ納得なつとくもした。

復員したその時の年令は、二十七才と九か月であった。満二十才一か月で軍隊に入り、爾来六年半、当初は一兵卒として次いで下級指揮官として、私の青春時代の総てを捧げ尽して軍務に奉公して来た。そして、戦場という特異環境の中で人間生存の極限を生ききてきた日々は、私の人生にとってかけがえのない貴重な経験であり、また私の人生の中でのかけがえのない貴重な時間でもあった。そして、この兵役期間が私にとってまさしく「第一の人生」であった。

復員して一月後に、また縁あって教職の仕事に復したのであるが、それから後の人生は常に五年ごとに目標を立てて生きて来た。

教職も、通算して三十九年を無事に勤め終え、また、その後の教育長職六年も有意義であった。さらにつづいて、日本赤十字社島根県支部の、百年史の編集を担当し、これも無事上梓しやうしの運びとなつて平成三年春に七十才六か月で退職。これで私の第二の人生は、兵役中同様強運に恵まれて無事終了することができた。